

ローカル線で行く！ フーテン旅行記 11

－ 沖縄周遊路線バス紀行 前編 －

岡山大学工学部機械工学コース助教

大西 孝



専門は機械加工（研削）。主に円筒研削や内面研削を対象として、工作物の熱変形や弾性変形に伴う精度の悪化を防止する研究を進めている。趣味は列車を使用した旅行（47 都道府県を踏破済）。

はじめに

お陰様でフーテン旅行記の連載も無事3年目を迎えました。これまで取り上げてきたのは各地を走る列車（一度だけ海外の台湾の鉄道を取り上げたことも）の旅でしたが、今回は少し趣向を変えて、路線バスの旅をご紹介します。南国情緒豊かな沖縄本島は旅行先として魅力的な地域ですが、一般的なレールの上を走る鉄道は沖縄県内に存在せず、那覇市内にモノレールが走るのみです。したがって島内を公共交通機関で巡ろうとすると、必ず路線バスのお世話になります。地域色豊かな路線バスの旅も、ローカル線と同じく旅に出たことを実感できる魅力的な乗り物です。フーテン旅行記では異例ともいえる路線バスの旅、沖縄の魅力を2回に分けてお届けします。前編の今回は、那覇から沖縄本島の北部を路線バスで目指します。

1. 那覇から名護へ 古城跡へ寄り道

南国の日差しが降り注ぐ那覇空港へ着きました。まずは沖縄都市モノレール（愛称：ゆいレール）に乗り、路線バスが集まる旭橋駅近くの那覇バスターミナルに向かいます。南北に細長い沖縄本島は、大きな都市や米軍基地が那覇市から本島の中部にかけて連続しており、名護市やその北側にある国頭（くにがみ）村は山原（やんばる）と呼ばれ豊かな自然が残り、また那覇より南の地域は、沖縄戦の激戦地となり多くの戦跡が残っています。まずは那覇市内から沖縄県中部を通り、北部の名護市を目指します。

実は那覇空港から名護までは、高速バスを使えば2時間もかからずに移動できます。しかしフーテン旅行記としては、当然ローカルな路線バスをチョイスします。名護へ向かう途中の読谷（よみたん）村に寄り、沖縄らしい



多くの路線バスが発着する那覇バスターミナル。待機中のバスが並ぶ様子は壮観ですが、現在はターミナルの改修工事中でこの光景は見られません。

古城の跡に寄っていくプランです。ゆいレールの旭橋駅前にある那覇バスターミナルからは各地を結ぶバスが次々と出て行き、まさに沖縄県民の移動を路線バスが支えているという実感がわかります。なお、那覇バスターミナルは平成27年4月に改修工事のため閉鎖され、平成30年3月まではバス乗り場が旭橋駅の周辺に散在していますので注意が必要です。乗り入れる本数は少ないですが、ゆいレールのおもろまち駅からも北部へ向かう路線バスが出ていますので、乗り場を探す自信のない方はおもろまち駅からのバスを利用するのがいいかもしれません。那覇バスターミナルから読谷バスターミナル行きのバスに乗り国道58号を北上すると、途中の宜野湾市から米軍施設が

車窓に目に入るようになり、よくニュースで耳にする普天間飛行場周辺の米軍基地、さらに嘉手納（かでな）町に入ると嘉手納空軍基地が進行方向右側に広がります。特に嘉手納基地とそれに続く弾薬庫のフェンスは、バス



バス停から歩くこと20分余り。読谷村の座喜味城跡によろやく着きました。



座喜味城跡の上から臨む。整然と組まれた石垣が城の周りを囲っています。

少々を歩きます。路線バスを使うと、観光バスのように城跡の前まで横付けされるわけではありませんが、地元の道を歩き、その土地の空気に触れるのも路線バスならではの楽しみです。座喜味城は15世紀初めに建設されたもので、今は石垣しか残っていませんが、アーチ状の通路が石垣に設けられ

がいくら進んでも途切れることなく並走し、米軍基地の多くが沖縄へ集中しているという現実を痛感します。

那覇から約1時間、読谷村の高志保（たかしほ）入口というバス停で降りて、座喜味（ぞきみ）城まで1キロ



名護に着いた後の夕食はタコスとタコライス。これも沖縄らしい食べ物です。

るなど、本州にあるお城とは少し趣が異なります。ゆったりと時間が流れる広大な城跡で、遠くの海を眺めながらのんびりするのも良いものです。お腹が空いたら地元のスーパーやコンビニを覗いてみましょう。沖縄らしいスパムや油味噌の入ったおにぎりなどが置いてあり、こういった地元の味を楽しむのも旅の醍醐味です。座喜味城からは一度国道58号まで路線バスに乗り、さらに国道上で名護行きのバスに乗り換え、さらに1時間程度バスに揺られて名護を目指します。途中の恩納(おんな)村で夕暮れを迎えましたが、海へ沈む夕日は息をのむようなきれいなものでした。

(岡山大学職員組合 組合だより207号より加筆のうえ再掲)



ポーク玉子(スパムと卵焼き)に油味噌を挟んだおにぎり。コンビニの品ぞろえにも沖縄らしさがにじみます。



読谷村から名護までのバスの車窓から見る夕日。恩納村の海岸付近で。

2. 沖縄本島の最北端を目指して 海沿いの路線バス旅行

沖 縄本島の路線バス紀行、沖縄県最北の市である名護市までやってきました。今度は名護市から突き出した本部(もとぶ)半島を路線バスで一周し、途中の海洋博公園や今帰仁(なきじん)城跡を巡った後、沖縄本島最北端の辺戸(へど)岬を目指します。



名護市のヒンプンガジュマル。道路の中央に鎮座し、車やバスは左右に避けて通ります。

名護市は人口6万人余りの街で沖縄本島北部の中心として栄え、オリオンビールの工場もあります。市内の大通りには樹齢が280~300年と推定される「ヒンプンガジュマル」が道の中央にそびえ、自動車や路線バスは高さ19m、幹の太さが10mもある巨樹をよけるように左右に分かれて進みます。「ヒンプン」とは

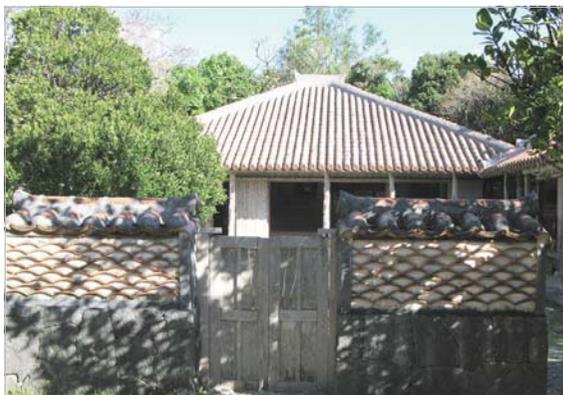
沖縄の伝統的な家屋の前に立てる目隠しの塀のことで、現地の看板によれば、この木の横に建てられた石碑がヒンプンのように見えることから、ヒンプンガジュマルと呼ばれているそうです。

名護市内から本部半島を一周する路線バスは、周る向きは異なる



海洋博公園。眼前には澄んだ海が広がります。写真の右手には美ら海水族館があります。

2路線がありますが、今回は先に海洋博公園を経由する路線に乗ります。名護市内を抜けたバスは海岸沿いを走り、車窓に広がる東シナ海を眺めていると1時間程で海洋博公園に着きます。ここは1976年に沖縄国際海洋博覧会が開催された場所で、今では全国的に有名な「美ら海水族館」や、沖縄地方の古くからの生活を紹介した「おきなわ郷土村」があります。水族館はまた来る機会もあるだろうと思い、次のバスまでの1時間は郷土村を見学することにします。この施設では琉球王国時代の地主の屋敷や民家、近年の民家、さらには与那国や奄美の民家も建てられており、暑い地域特有の工夫も見られ、本州とは異なる建築構造がよく分かります。



おきなわ郷土村で沖縄地方のかつての暮らしを学ぶ。家の構造も本州とはだいぶ違います。

「美ら海水族館」や、沖縄地方の古くからの生活を紹介した「おきなわ郷土村」があります。水族館はまた来る機会もあるだろうと思い、次のバスまでの1時間は郷土村を見学することにします。この施設では琉球王国時代の地主の屋敷や民家、近年の民家、さらには与那国や奄美の民家も建てられており、暑い地域特有の工夫も見られ、本州とは異なる建築構造がよく分かります。



今帰仁城跡から海を望む。山の上からは城を囲む城壁がよく見えます。沖縄に来たという実感がわく風景です。

再び路線バスに乗り、今帰仁城跡入口まで約10分。この今帰仁城跡も、前回の座喜味城跡と同様、バス停から城跡まで歩く必要があります。バス停から歩いて約15分、最後は石段を上がると今帰仁城跡です。今帰仁城跡は山の上にあるため見晴らしが良く、周囲を囲む城壁の向こうには沖縄らしい澄み切った海を眺めることができます。苦労して登ってきただけあり、素晴らしい風景に感動もひとしおです。



沖縄といえばソーキそば。名護市内へ戻り、辺戸岬へ向かう前に腹ごしらえをします。



国頭村営バスは海岸線に迫る山に沿って辺戸岬を目指します。この地域を含む沖縄本島北部は山原(やんばる)と呼ばれます。

今帰仁城跡から名護に戻り、沖縄名物のソーキそばで腹ごしらえをした後は、沖縄本島最北の辺戸岬を目指します。名護バスターミナルから海岸線に沿って北上すること約1時間、国頭(くにがみ)村の辺戸名(へんと)

な)バスターミナルに着きます。バスターミナルといっても、簡単な待合所があるだけの場所です。訪問したのは1月でしたが暑いので隣の商店でアイスクリームを買い、辺戸岬へのバスを待ちます。辺戸名から先は、乗客が少ないため民営の路線バスはすでに撤退しており、国頭村営バスが1日に3往復、沖縄本島最北端の辺戸岬を経て、その先にある集落を結びます。辺土名から先の村営バスは、切り立った山が迫る海沿いの道をひたすら北上します。車内は高齢のお客さんが多く沖縄方言の会話はさっぱりわかりませんが、運転手さんが「お客さん、どこから来たの〜?」と陽気に話してくれます。辺

土名から30分余りで辺戸岬へ。天気の良い日は20km少々離れた鹿児島県の与論島が望めるそうですが、訪れた時はあいにく曇りでした。しかし県都の那覇から路線バスを乗り継いで、沖縄本島の最北端まで来たという達成感のようなものを感じました。



沖縄本島最北端の辺戸岬。訪問時は残念ながら鹿児島県の与論島は見えませんでした。

(岡山大学職員組合 組合だより 208号より加筆のうえ再掲)

おわりに

今回は沖縄本島を北上する路線バスの旅をお届けしました。那覇空港に到着した翌日には沖縄本島の最北端までたどり着くことができましたが、路線バスに乗っていると地元の香りが強く感じられ、見聞きするものが



日の暮れた名護从那覇へ戻ります。ヒンプンガジュマルをくぐる那覇行きの路線バス。

新鮮に感じられました。路線バスの旅は時間がかかりますが、観光バスやレンタカーを使った旅行とは一味違う面白さがあるのも確かです。さて、次回は南部の戦跡をめぐるとともに、沖縄唯一の鉄道路線であるゆいレールの乗車記をお届けします。お楽しみに。